

悠久の京を訪ねて Part VI Vol.5



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

Part VIでは京都府内で見つかった、ものづくりに関する遺跡を紹介します。

まつりの道具をつくる

■まつりの道具としての石製模造品

古墳や集落跡から滑石製の石製模造品が出土することがあります。これらは武器や鏡、装身具などを形取った、葬送儀礼や集落内での儀礼に使われたまつりの道具と考えられています。石製模造品の多くには穴が開けられており、吊り下げて使用していたとみられます。また、溝や水田の水口に近い地点から出土する石製模造品は、農耕に関する儀礼に使用したまつりの道具を大切な場所に埋納したものと考えられています。

■まつりの道具の製作と供給

石製模造品は、古墳時代中期から後期の集落跡では、一般的に少量しか出土しません。しかし、相楽郡精華町森垣外遺跡では発掘調査区全体から数多くの石製模造品が出土しました。

森垣外遺跡は、一辺25mの溝で囲まれた首長の居館を中心に数多くの建物が密集していました。農



石製模造品 (左から剣、勾玉、鏡を模倣したもの)

工具などの鉄製品を作り、朝鮮半島の陶質土器が出土するなど、高水準の技術をもち、広範囲な地域との交易を行っている、南山城地域では新しい技術をいち早く取り入れた集落といえます。

発掘調査により石製模造品の製品のほか未製品、原石が多数出土し、集落内で石製模造品を製作していたことがわかりました。原石である濃緑色の滑石は、色調や材質などから和歌山県紀ノ川流域で産出するものとみられています。

また、近接する精華町柿添遺跡において森垣外遺跡で製作されたと考えられる石製模造品が出土していることから、周辺の村々へも供給していたようです。森垣外の集落は、遠隔地から原石を入手して石製模造品を製作し、周辺の村へ供給する生産拠点として機能していたのでしょうか。

森垣外遺跡の調査は、当時の石製模造品の生産や流通の一端を考える上で重要な発見となりました。



密集して住居が営まれた森垣外遺跡